

”An Introduction to Marx's Critical Theory” (マルクスの批判理論への序論)

ウィレーン・ムーティ

モイッシュ・ポストン先生の議論を理解するために、まず、彼のマルクス主義に関する解釈が伝統的なマルクス主義とどのように違うのかについて、少し説明させていただきます。彼は今日、この違いを詳しく説明して下さると思いますので、私からは基本的なポイントだけを指摘させていただきます。ポストン先生によると、伝統的なマルクス主義は超歴史的な立場から議論を行っています。つまり、伝統的なマルクス主義者は、超歴史的な労働という概念に依拠して資本主義を批判するとポストン先生は考えています。それに対して、ポストン先生は資本主義における労働こそを問題にしなければならないとしています。伝統的なマルクス主義者は労働の立場から資本主義を批判しますが、彼らにとって資本主義とは市場や経済的な構造のことです。ポストン先生によると、そのような狭い意味での資本主義理解では二十世紀の資本主義を解釈することはできません。二十世紀の資本主義において、特に30年代から70年代まで、国家はとても重要な役割を果たしていました。伝統的なマルクス主義はそうした変化を解釈することができないので、マルクス主義はだんだん無視されるようになりました。けれども、ポストン先生は資本主義をもっと根本的に解釈しようと試み、二つの観点から考察を進めています。まず、彼は労働というものを歴史化します。次に、彼は資本主義の中の労働、いわば商品化された労働を近代のすべての機構と文化の基礎として解釈します。こうした解釈が成り立つとすれば、近代の合理化も資本主義の過程の一部として理解することができるはずです。

けれども、労働はもちろん、ポストン先生の議論においても、非常に重要な役割を果たしています。まず、資本主義において労働は商品の形態に見られるような二重性を持っています。周知のように、商品の形態は交換価値と使用価値に分けることができます。使用価値は商品の具体的な側面を示しており、物はいかに具体的な需要を満たすかということを示します。交換価値は逆に抽象的であり、その見地から見れば、商品はすべて均質で、交換する或いは比較することができます。では、何を持って比較する

のでしょうか。普通は貨幣によって測定されると言われますが、『資本論』の冒頭の部分で言及されているように、資本主義社会で貨幣の基礎は労働あるいは労働時間、言わば価値です。資本主義においては、労働もまた商品となり、それも抽象的な労働と具体的な労働に分けて考えることができます。抽象的な側面、いわば交換の側面から見れば、さまざまな活動が労働としてお金と交換することができるわけです。この状況は資本主義以前の社会とは異なります。近代性を論じる人々は常にそういう交換の側面から生じる均質化を指摘しますが、ポストン先生は近代性という歴史的な現れを資本主義の中の労働と商品の過程と繋げて論じます。つまり、彼にとって、資本主義の一番重要な特色とは、資本主義社会が商品としての労働によって媒介されているという点です。それは多様な意味を持っています。例えば、消費者の見地から見れば、使用価値としての商品を買うお金を獲得するために労働しなければなりません。他方では、生産の過程によって価値の基礎も労働になります。つまり工場で資本家は労働を通じて交換価値を持つ商品を作り、利潤を得ようとします。そうして、技術がいかに進歩しても資本家の利潤は常に労働時間と繋がっています。時間という問題は第三回のレクチャーで詳しく論じられる予定ですので、ここでは、労働時間を減らし利潤を上げるために技術が利用されているということを指摘しておきたいと思います。普通のマルクス主義者は利潤を論じる時、労働者と資本家のそれぞれの利益をめぐる矛盾に注目します。その矛盾はもちろん無視できませんが、ポストン先生によれば、この矛盾に注目するだけでは、資本主義のより根本的な論理を見逃してしまうことになります。つまり、資本家と商品としての労働者は利益を得るために戦っているのですが、その背景にあるより根本的な社会論理、いわば資本の論理に注目すべきだとポストン先生は述べています。ポストン先生にとって、資本主義は新たな抽象的支配と繋がっています。この抽象的支配は伝統的なマルクス主義者の指摘してきた資本家対労働者という単純な支配構造ではありません。つまり、この抽象的な支配はより包括的なものであり、ポストン先生によると、資本家は労働者より利潤を得ているものの、資本家も資本主義のプロセスから支配されているという関係を認めなければなりません。そのプロセスは上述した商品の形態と価値を中心になされるものであり、全面的な歴史的ダイナミズムになります。より具体的に言えば、資本家は資本主義社会の標準的な生産速度の歯車とは無関係には存在できないのです。

II. フランクフルト学派とハーバーマスへの批判

ウィレーン・ムーティ

前回の講演で、ポストン先生は伝統的マルクス主義とご自身のマルクス主義の違いについて講演なさいました。今回はポストン先生ご自身が影響を受けたフランクフルト学派の批判について私たちから説明致します。

伝統的なマルクス主義者と異なり、フランクフルト学派は資本主義をより根本的に把握します。つまり、彼らはウェーバーのいう合理化を資本主義の一部としてマルクスを解釈するのです。ルカーチは一番最初に、ウェーバーのいう合理化とマルクスのフェティシズムとつなげて解釈しました。つまり、近代国家の官僚制度と近代会社の構造は基本的に商品の形態を表現するわけです。ポストン先生はルカーチの物象化説を継続する一方で、労働者に関するその理論を批判します。ポストン先生によると、労働者は歴史の主体ではなくて、資本そのものが歴史の主体なのです。ポストン先生の解釈によれば、ルカーチも伝統的なマルクス主義の労働説に近いのです。

例えば、Friederick Pollock は、共産主義が支配した国々を資本主義の別な形として理解しました。フランクフルト学派の人々の言説は正にフォード的な資本主義が成立していた時のものであるため、彼らは国家と資本主義の関係を的確に捉えていました。しかしポストン先生によれば、彼らは資本主義を矛盾している過程あるいは動的なものとして理解しておらず、それゆえ彼らは資本主義を超えることができずに悲観的な理路に陥りました。つまり、超歴史的な労働階級を主体として信じていた伝統的マルクス主義者は社会主義の可能性を比較的楽観視していたのに対して、例えば Max Horkheimer のようなフランクフルト学派の学者は、ポストン先生のように労働階級自身を資本主義の一部として理解しています。けれども彼らは労働階級に失望した結果、資本主義を超える可能性を想像することができなくなりました。Jürgen Habermas はこれに対して、また労働者と違う別の、資本主義の外の立場に依拠して資本

主義を批判しようとした。それがいうまでもなく、彼のいう「理想的コミュニケーション」です。
しかし、彼も資本主義を単一的に理解しており、資本主義を超える可能性については論じませんでした。

ポストン先生はつねに資本主義の二重性を強調し、そのような動的な二重性の中に資本主義を否定する可能性を見つけようとしています。その矛盾については第三回目で詳しくお話しますので、ここでは簡単に説明します。資本主義の歴史的運動の中で相対剰余価値の生産により技術がどんどん進歩し、それに伴って労働の役割がいよいよ減少していく一方で、他方では、依然として価値の源泉に労働を依拠せざるを得ません。ですから、どんなに生産しても、一般の人民はその生産過程と条件について無能な観客でしかありません。そうすると富と労働時間を源泉とする価値を区別することができます。ポストン先生は、生産という過程が人間を支配する代わりに、人間が生産過程を支配することができるのではないかと論じています。そうした可能性は資本主義における労働の役割の減少ということに因りますが、資本主義の過程は自然に超資本主義社会をもたらすわけではありません。換言すれば、技術の発展自身は新しい生産様式を実現することができません。逆に技術の発展も資本主義を再生産して、先に述べた矛盾は、非労働者、例えば失業者などを次第に生み出し、現在みられるような数々の社会問題を生み出すとポストン先生は述べています。

III. 時間と歴史

ウィレーン・ムーティ

今日はポストン先生の第三回の講演会です。前二回の講演に参加した方はポストン先生の基本的な立場と彼のマルクス解釈についてもう学習されていることでしょう。前回参加しなかった方のために、私は今日のテーマについて少し話をさせていただきたいと思います。

今日のテーマは時間と歴史です。ポストン先生はこの二つの概念を資本主義の中心的な概念として解釈しています。ポストン先生によると、時間の概念は資本主義社会の中では、他の現象と同じように商品の形の影響を受けています。第一回で述べたように、商品の形は二つに分かれます。使用価値と交換価値、つまり、商品の具体的な側面と抽象的な側面です。交換価値の見地から見れば、商品は皆同じように見えます。換言すれば、商品の具体的な側面は否定されて、完全に価値として現れます。価値については第一回にもう触れましたので、今から直接、時間の問題に入ります。

抽象的時間という概念は、交換価値のように具体的な時間が否定されて、連続する同じような「今」として現れています。それは、ポストン先生の言葉でいうと、「独立関数としての時間 (time as an independent variable)」です。それに対して、非資本主義の社会では、時間は「従属関数 (dependent variable)」です。従属関数というとは、それは何に依拠しているのかという質問が出てくるでしょうが、それはそれぞれの社会によって違います。大まかにいうと、前資本主義社会では、時間は何らかの変化に即して現われていました。例えば、農村社会において、時間は常に季節の変化と密接な関係を持ちます。

逆に、資本主義社会において、時間は労働と価値を測定するので、時間は必ず運動や変化と区別されます。そして、資本主義社会では時間を厳守することがとても重要になるので、時間はまた、普遍的で抽象的な標準にならなければなりません。こうしたすべての変化は資本主義と商品の形に還元されます。そのような抽

象的時間はニーチェとハイデガーが批判したものであり、彼らはもう一つの具体的な時間を強調します。ポ
ストン先生にとっては資本主義そのものはもう一つの時間概念を含む、いわば歴史的時間です。

歴史的時間はマルクスの相対剰余価値説と関係しています。そして、歴史的時間は抽象的時間の見地から
理解することはできません。歴史としての資本主義過程はまさに相対剰余価値の生産と再生産にかかわりま
す。つまり、資本主義社会において、生産力は技術によって増大し、そして、富も増えていきます。相対剰
余価値説によると、資本主義社会では一時間に生産できる量がだんだん増えていくのです。その生産速度が
平均を上回った時、この速度が新しい標準になります。それゆえ、現在、もしある会社が機械なしで商品
を生産したら、競争できないはずで

ところで、労働価値説によると、価値は労働時間から測定されるので、資本主義社会では富は増加しま
すが価値は変化しません。つまり、機械によって大量生産が可能となりますが、それぞれの商品の価値は下落
するので、全体として価値は同じなのです。ポストン先生はそれを「トレッドミル効果 (Treadmill
effect)」 或いは「ルームランナー効果」と名づけました。一時間の生産標準はだんだん上がっていくので、
同じ価値を維持しようとするればもっと早い速度で生産しなければなりません。そのような社会過程において
富は増加しますが、それは私たちのためではなくて、逆に、私たちはいわば準客観的な過程によって支配さ
れています。準客観というのは、人々もその過程に参加してそれを再生産しているからです。

ポストン先生の言葉でいうと、資本主義の生産力は「逃走する生産力」です。ですが、富と価値との区別
の中に別の社会構造の可能性も見えてくる、とポストン先生は述べます。つまり、技術の発展によって、価
値に支配された過程を否定して、別な生産様式を作る可能性がだんだん増えていますが、その可能性を実現
するためには歴史的時間と抽象的時間を両方否定しなければならないのです。それについてはもう少し討論
することができると思います。さしあたり私は、いったいどういうプラクシスでもって資本主義を否定する
ことができるのか、という問いを提起しておきたいと思います。